

■ オーケストラピット・吊物設備について

基本的な機能		
オーケストラピット (舞台機構設備)	<p>オーケストラピットは、その名前の通り“オーケストラが演奏するためピット”のことを言います。一般には、舞台と客席との間にあり、舞台での演技を鑑賞するのに支障がないように、客席面から少し掘り込まれた深さのところにオーケストラの演奏面を設置するのが一般的です。このオーケストラピットを利用する演目としては、オペラやバレエ、そしてミュージカルの他にも音楽劇などでも利用します。オペラやバレエの専用劇場では、オーケストラピットは常時オーケストラが演奏することから固定のピットとして設けられていますが、演劇や集会などオーケストラの演奏を伴わない催物の利用にも配慮して、客席の一部や前舞台としても利用できるオーケストラピットを計画することが多くなっています。</p> <p>地域の公立ホールでは、オペラやバレエ、ミュージカルなどを“生オケ”を入れて上演することが必ずしも多くないことから、実際の使用頻度としては、張り出し舞台(演劇や合唱付きのオーケストラ演奏会など)として使用する機会の方が多いたともわれています。</p>	
	設置することの優位性	設置することの負担
	<p>オーケストラピットがなければ、オペラやバレエ、ミュージカルなどを“生オケ”の演奏付きで上演することができません。ただし、オーケストラピットに準ずる“ピット(掘り込み)”が前舞台に設えてあれば、手動で客席前部の椅子と床を取り外す(時間と人手がかかりますが)ことでオーケストラピットを仮設することもできます。</p> <p>また、オーケストラピット迫を設置し、動力を用いてオーケストラ演奏面から舞台と同じレベルまでオーケストラピット迫を昇降させることで、演劇や合唱付きのオーケストラ演奏会で簡易に舞台を張り出すことができるようになります。特殊なケースですが、舞台芸術の表現として、オーケストラピットを川に見たてて実際に注水して使用するような演出も行なわれることがあります。</p>	<p>動力を用いたオーケストラピット迫(及び可動客席ワゴン、オーケストラピット手すりなど)を設置することになると、設置のためのインシヤル経費と性能を維持していくためのメンテナンス経費が毎年必要になります。</p>

基本的な機能		
吊物設備(動力化) (舞台機構設備)	<p>主舞台上部を中心に吊り込まれている舞台機構設備を“吊物設備”と呼びます。これらの設備を駆動させる方法は、かつて全て「手動」でした。しかし、動力性能の向上と制御技術の進化によって今日では電気を動力とする「電動」の設備が多用されるようになってきています。もちろん、音響反射板や舞台照明バトン・ブリッジなど重量のある吊物設備については、古くから動力化が図られてきましたが、コンピュータによる制御技術を取り入れた動力化は、ここ15年くらいに急速に進化をしてきました。特に「電動ドラム巻取り式(カウンターウエイレス)」は、ここ数年間に整備される主たる公立文化ホールの全てに導入が図られています。</p> <p>また、諸外国では、新規に整備される劇場では、手動での吊物設備の設置を抑制するようになっている国もあります。</p>	
	動力(電動)化することの優位性	動力(電動)化することの負担
	<p>積載荷重以外にバランスをとるためのカウンターウエイ(鎮)を持つことは、建物全体に対する積載付加を必要とすること、震災の被害を受けた劇場で明らかのように、7~10kgのウエイが舞台に落下する危険があります。また、積載物(大道具など)とカウンターウエイのバランスを欠いてしまったり、作業手順を間違えることで、これまでも人身を含む事故を起こしてきました。</p> <p>電動ドラム巻取り式の吊物設備は、カウンターウエイレスですので、カウンターウエイの落下や吊物とのアンバランスによる事故は基本的に発生しません。また、ワンマンオペレーションにより複数台の吊物設備を無段階に可変速させることや同時起動・同期運転、最大で手動の4倍近い積載荷重を昇降させることができるなど、これまで手動ではあり得なかった演出が実現できるようになりました。</p>	<p>動力化を図ることは、手動に比較して設置のためのインシヤル経費が高くなることと、性能を維持していくためのメンテナンス経費が高くなることが上げられます。</p> <p>ただし、手動の吊物を安全に操作できる技量を備えた舞台技術者を公演ごとに招集する必要があることを考えると、ランニング経費がほぼ人件費となってしまう手動吊物設備では、吊物バトンを多用する演劇やミュージカル、イベントなどを上演する際に逆に動力による設備に比較して利用者の経費負担が大きくなるという懸念があります。</p>